

五、乙兵团（独立混成第三旅团长ノ指揮スル歩兵第三大隊基幹）……戦闘司令所ヲ十六日東治鎮ニ開設

六、丙兵团（第二十六師团长ノ指揮スル歩兵第六大隊基幹）ハ十七日夜靈邱、浹源附近ヨリ行動ヲ起シ：

戦闘司令所ヲ十六日広靈（靈邱北約三五キロ）ニ開設ス

方面軍は十六日夜、既定の構想に基づき進攻。九月末までの第一期作戦の戦果は敵主力は極度に戦闘回避に努めたため戦果は僅少であった。

各兵团は作戦の長期化に伴う敵の困憊に乘じ、活発に追躡撃破し、あるいは掃蕩剔抉し、また敵遊撃戦法を逆用する等創意工夫に努め、十月二日から第二期作戦、同月二十三日から第三期作戦において相当の人的、物的戦果が認められた。作戦当初の活発だった遊撃戦、地雷戦、後方治安攪乱も低調となり、一部には帰順投降する者さえ漸次増加し、阜平周辺の敵軍政中枢諸機関を覆滅し、多量の抗戦資材を摘発した。

第三期作戦を一カ月延長、徹底掃討実施、十二月十

日終了。敵の遺棄屍体四、三〇〇、俘虜二、六〇〇、覆滅施設一、六六〇、ほか鹵獲兵器、弾薬、資材、雑穀など莫大な量に達した。

駐蒙軍自動車第二十三連隊

主力引揚げ後の残留部隊

山口県 叶谷孝一

内蒙古の厚和・包頭などにいた部隊で、駐蒙軍主力が昭和二十一年五月、内地に復員した後に、なお多くの人（軍人・一般邦人）が残留していました。その人々の記録を記述いたします。

昭和二十年八月十五日、日本の敗戦を内蒙古の大同で迎えました自動車第二十三連隊本部は、駐蒙軍司令部の命令により張家口に引き揚げました。第一中隊と厚和の第三中隊の一部が大同に引き揚げ合流、その後、私の所屬しました第一中隊は、第四独立警備隊（至誠部隊）の坂本少将の指揮下に編入されました。終戦後、

張家口はソ・蒙軍の追撃を受けていたのであります。

敗戦後、大同に集結した包頭・厚和・平地泉・大同などの在留日本人は家族を含め五千人近くだったと思えます。この方面には幸いにもソ・蒙軍は進撃して来なかったのですが、大同と張家口をつなぐ鉄道（京包線）の鉄橋が爆破されて、復旧不能となつてしまいました。

このため、在留邦人も守備隊も張家口経由で大同へ引き揚げることは不可能になつてしまいました。残る経路は鉄道で北支那の太原、石家荘、保定を経由して北京、天津へ出るといふ大回りのルートしかない。当時、敗戦とともに活発化した国共（蒋介石の国民政府と毛沢東の中共軍―八路軍など）内戦の中をかいくぐつて引き揚げるのは至難の業でありました。

内蒙古西部地域で日本軍と対峙していたのは傳作義將軍指揮下の国民政府第十二戦区軍でありました。しかし、第四独立警備隊司令（司令官坂本吉太郎少将）は退路の安全を考慮して、南の山西省太原に司令部を置いていた支那派遣軍（北支那方面軍）第一軍（軍司

令官澄田 四郎中将）に合流（第四独立警備隊は駐蒙軍隷下であつたが）、第一軍方面の国民政府軍第二戦区（閻錫山軍）に降伏する道を選びました。

したがいまして、傳作義軍の降伏要求と大同への入城を拒否し、大同では国民政府軍第二戦区（閻錫山將軍）の北方作戰司令官楚溪春將軍の部隊に大同城を明け渡し、武装解除に応じたのです。

これによつて、在留邦人の引揚げがはつぱつ始まりました。一日に一列車ぐらゐといったペースで太原方面に輸送しました。しかし、ストリートに到着することとは困難でした。共産八路軍の妨害による鉄道不通など、途中沿線の街、懷仁、寧武、大牛店、欣泉などに降り、太原行の列車を何日も待つことがあつたようでした。

その後、太原は日本軍の第一軍が閻錫山軍と共に警備について、昨日の敵は今日の友となつて同方面の治安が保たれるようになりました。これによつて、第一軍は鉄道警備の一部隊を除き武装解除がスムーズに実施されましたが、八路軍の攻勢が激しくなると閻錫山

將軍は、日本軍を対八路軍戦に使用しなければ治安の維持が困難となりました。

そのため、いったん没収していた日本軍の兵器を貸与という形で日本軍に返却し、八路軍の撃退に当たらせることとなったのです。とくに山西省北部と大同地区は八路軍撃退をとの要請を受けた次第であります。

この山西省北部と内蒙古大同地区に対する八路軍の攻勢は一段と激化していましたから、この任務が第四独立守備隊に回ってきたのであります。在留邦人と日本軍主力引揚げのための第一軍からある程度の軍隊を残留させるよう指示がありました。「日本政府からの命令は、全軍の復員とあるが、現状では日本軍主力の安全な撤退を援護するため、後衛尖兵を置くこともやむを得ない」と述べ、日本軍が急速に引き揚げることになりました。

残留部隊については、警備隊から一個連隊程度の兵力、その他の部隊もこれに協力することになりました。

特に特別部隊（戦車隊、動車隊、野砲兵隊等）にも波及してきました。というのも、接收した兵器の使用

方法が国民政府軍將兵には分からないのです。特に、機械に関する知識が全然ないために、前の特別部隊が重視されました。

私も中隊の將兵の主力を無事帰国させたいと考え、残留の要請に応じることにしました。また、当中隊は広島県編成（第五師団）なので、広島は先の原爆で焼野原だということも手伝い、ある程度の將兵が残留を決意してくれました。

後に戦車隊を含めて、中華民国山西省太原綏靖公署大同教導総隊機甲大隊を編成しました。国民軍將兵も編入し、自動車の行動並びに運転技術、修理技術を指導することに留用になりました。

歩兵部隊では参謀の林豊大佐を総隊長とし、第二二大隊長の五味丑之助少佐を副隊長として、まがりなりにも兵団の三分の一以上、約七百名の編成を完成しました。兵団長坂本少将から「おかげで兵団本隊が帰還できるようになったことを感謝する。諸君の今後の健康を祈る」と訓辞がありました。これによって本隊は大同を引き揚げました。

引揚げ後、残留将兵は国民軍の軍人となり、氏名も中国名とし、階級も兵隊は少尉に、下士官は大尉に、尉官は佐官に進級させ、私も大佐の待遇を受けることになりました。残留三年経過すれば無事帰還させるという約束ができました。

当時、山西省ではインフレが激しく、例えば私の給料は二億五千万円でした。中国の銀貨三十枚相当で、日本円に換算すると約三万円程度でした。当時煙草一個四十万円でした。支払は一枚々々数えず札束で何個という具合に支払うという、今では考えられないような状況でありました。

食糧は、大同に日本軍の糧秣廠があった関係で、余り不自由しなかったようです。しかし、三年目にはなくなり現地調達をしていました。

その内、中共軍は大同を包囲し戦は激化してきました。遂に大同駅付近まで敵は侵入しました。この地区を守っていたのは満州馬賊で有名な「馬占山」の指揮する東北挺身隊軍で、満州事変以降、日本軍の仇敵だった彼等と我が軍が肩を並べて戦うことになり、歴史

の皮肉と言わずに何でありましようか。

日本軍は、四一式山砲を引つ張つて馬占山軍の救護に向かったのです。大同北方二キロの白馬城で中共軍と遭遇、初弾が見事山麓の望楼を吹き飛ばしました。中共軍は我が砲兵の威力に恐れをなしたか退却しました。

昭和二十二年、二十三年秋と国共内戦が下火となった時、留用解除となりました。このとき期を見計って残留部隊は独立で大同から全邦人と将兵の大半を帰国させることになりました。

我々も第二陣として帰国の途につきました。帰国に当たり旧斎藤元中尉（旧第一中隊小隊長）の輸送指揮の下に、自動車で遙か平地泉を経て張家口までトラックで、将兵と邦人約三百人を輸送し無事送り届けました。そして、北京―天津―塘沽から、商船大学練習船「海王丸」で、昭和二十三年十月、懐かしの日本本土、佐世保に上陸しました。輸送隊（斎藤中尉）は帰路、中共軍に遭遇し、何昼夜も砂漠を放浪し大同にたどり着いたと聞いています。

【解説】

―駐蒙軍自動車第二十三連隊、

主力引き揚げ後の残留部隊―

自動車第二十三連隊の部隊略歴は次の如くである。

昭和十五年三月二十五日、軍令陸甲第一号により大同に於て編成完結、駐蒙軍の隷下に入る。

連隊は張家口、大同、厚和、宣化に夫々分散位置し、蒙疆地域内の軍需品輸送並に国防資源の輸送に任ず。

昭和十九年度京漢作戦には第三中隊を、昭和二十年度老河口作戦には連隊主力参加す。六月上旬、任務終了、大同に帰還。第四独立警備隊司令官の指揮に入。なお第三中隊主力及び材料廠の一部は引続き第十二軍に配属中のところ、二十年十一月、自動車第二十五連隊に全員転属す（将校は命課換）。

連隊本部は八月十六日、軍命に基き大同より張家口に転進、第二、第四中隊材料廠を指揮し、終戦時における集結。兵力軍需品輸送実施中、八月二十日南口に集結。

第四独立警備隊司令官の指揮にありし第一中隊主力

並びに第三中隊の残留隊材料廠の一分廠は、昭和二十年十一月十一日、独立警備歩第十九大隊に全員転属す

（将校は命課換）。

十一月五日、北平に於て将校以下百名、鉄道第十八連隊に転属す。

八月二十七日、南口より清河鎮。九月十七日、北平西郊地区に。十一月二十六日、豊台に。同二十七日、天津に集結す。三十日、塘沽乗船。十二月一日、同地出帆。同五日、佐世保上陸。同六日、復員完結。

―第四独立警備隊部隊略歴―

昭和二十年三月十五日、蒙疆大同以西地区の警備に任しありし第一百八師団（恵）の中支（上海付近）方面への移駐に伴い、総軍編成規定に基き第四独立警備隊編成に着手。

編成要員は第一百八師団より約二個大隊（兵力四、〇〇〇）を基幹とし、独立混成第二旅団（響）より約二個大隊（兵力約二、五〇〇）及び其の他より抽出し

た左記編成において、三月三十日、編成完結す。

四月五日、第百十八師団と警備交替し、左記地点に司令部及び大隊本部を位置せしめ地区の警備に任ず。

司令部、作業隊、独立警備歩兵第十九大隊―大同。

同第二十大隊―渾源。第二十一大隊―托克托。

同第二十二大隊―厚和。第二十三大隊―朔県。

同第二十四大隊、駐蒙軍直轄軽装甲第一中隊―包頭。

同第二中隊―厚和。

八月九日、ソ軍宣戦布告に伴い、外蒙地区より平地泉―大同へ南下を企図しあるソ軍を邀撃すべく、独立歩第二十一、第二十二、第二十四大隊を平地泉に、其他各大隊は大同に兵力集結準備中なりしが。

八月十五日、終戦の大詔を拝し、駐蒙軍作命により全兵力を大同に集結を命じたるが、集結意の如くならず、独立警備歩兵第二十四大隊を除き隷下各大隊は、九月六日、集結を完了せり。

八月十四日、第二十四大隊は包頭において、重慶軍第十二戦区軍約二万に包囲せられ武装解除後集結せり。

十月三日、警備隊は大同集結後、管内居留民約一、

三〇〇名を大原経由により平津（北平、天津）地区へ集結と、警備隊の越冬準備のため、左記の如く兵力を北同浦線等に配備し鉄道の確保に任ぜり。

重慶軍は八月十九日、第十二戦区軍先遣隊長に指揮する約四、〇〇〇駐留、次いで、九月一日、第二戦区軍の指揮する約六、〇〇〇進駐し、受降戦区は一時不明なり。

九月二日、正式に降伏の調印せり。

九月十六日、兵器及び軍需品の接收は概ね完了す。

警備隊兵力、編成完結時、八、一〇七名なりしが、八月十五日までに一、八〇一名を補完せらる。

二十年四月一日 初年兵（現役） 三四〇名

四月二十日 第四十三軍より転属兵、

三五〇名

四月下旬、六月二十日、補充兵、現地召集兵

七〇〇名

七月 第六方面軍より将校、準士官、

見習士官。